

今年がわが国で最初の理論物理学者石原純の生誕百年に当たるので、「石原純生誕百年」という一文を雑誌『科学史研究』へ掲載することを思いつき、その内容につき研究仲間と相談をした。それはこの科学者の学問上の業績を歴史的に展望することを主体とするはずであるが、また一方において石原純と歌の世界は切り離すことができないので、「石原純と短歌」という一項を加えなくてはなるまいと考えた。しかしこの項目は『科学史研究』にはなじみにくいので、どんなふうに書いたものか迷いを生じて来た。ちょうどそのとき雑誌『短歌』から原稿の依頼を受けたので、この話をしたところ、それで結構ということで、渡りに舟の気持ちでこの一文を認めることができた。

石原純といっても今では知る人が少ないかも知れない。中には女流歌人原阿佐緒との恋愛事件で東北大学教授の職を棒にふった理学博士というくらいの認識をお持ちの方もおられよう。そう言われても石原純という人は弁解はしらないと思うが、それだけの人と見るのは認識不足である。石原は難解をもって有名なアインシュタインの相対性理論を日本で最初に研究し、その上に立ってこの学説を日本の学界に解説紹介した。また量子論の研究もおこない、これらの業績によって大正八年に恩賜賞を受けた。

東大の物理教室には12月二十五日のニュートンの誕生日をだしに使った忘年会があつて、これをニュートン祭と呼んでいる。大正十四年であつたと思うが、その年のニュートン祭にはヨーロッパの学会へ出席した長岡半太郎教授の帰朝談があつた。この会は無礼講であるから、こんな話もあつた。「X——から石原はどうしているか、ときかれたから彼はロマンチック・ライフをやっていると答えたら、そんな事をきいてるんじゃない、何を研究しているか聞いているんだ、と言われ大いに教えられた、ハッハ」。X——と書いた人の名前は忘れてしまつて思い出せないが、ゾンマーフェルドかラウエであつたかも知れない。石原の論文がこのごろ出ないな、と氣遣つていたのは、この二人のうちの何れかであつたと今思うのである。長岡半太郎も返事の言葉に窮してあんなことを言つたのであろうか。さて石原純が理学を専攻しながら短歌の世界へ入つて行つた事情については、石原純の歌集『鬢日』の序文を見るのが一番よい。初めに、高等学校へ入るとき理科にするか文科にするか迷つたとあつて、それからこう述べている。

丁度私の一高時代に「日本」新聞上にあらはれた正岡子規氏の「歌よみに与

ふる書」や「人々に答ふ」などの歌論を読んで私はそれを大層おもしろく感じました。そしてそのなかに引かれてあつた万葉集や金槐集の歌に深く讚嘆したのでした。私はその前から当時最も盛であつた俳句などを見てはゐましたが、そしてそのなかには私の心を動かすものもありはしましたが、一体に短い客観句だけではどこか物足りなさを感じてゐたので、万葉集の多くの歌が切実なる響をもつて私たちに迫るのを見て、悠ちに「タダチニとかタチマチとよみたいが、この字は正しくない」その方に心を惹かれずにはゐなかつたのでした。明治三十五年の春になつて鈴木葎房主人の選のもとにいろいろな募集歌が同新聞紙上にあらはれたのを私は興味深く読みながら、自分でも始めて「初めて」歌作を試みるやうになりました。同年の秋、正岡先生が逝くなられて私は永久にお目にかかる機会を失つたことを憾みましたが、間もなく根岸短歌会同人によりて雑誌「馬酔木」の生まれたことをうれしく思ひ、それを熱心に読んで歌をつくりました。翌年になつてから始めて「初めて」その同人の中心になつてゐた伊藤左千夫氏を本所の寓にたづね、それから明治四十四年に私が仙台に移住するまではずつと終始親しくその教を受けてゐました。

長い引用をおこなつたのは、これで非常によく分かるからである。この『鬢日』という歌集は大正十一年、私が高等学校の学生るとき出版になつた。『相対性原理』や『エーテルと相対性原理の話』の著者が歌集も出したのかと珍しく思い、早速買って読んだ。シベリア経由でヨーロッパ留学に向うときの歌などを今でもうすばんやりと覚えてゐるのは、憧がれのような気持ちで読んだせいであろうか。この文はなるべく客観的に書こうと思うのだが、このような自分の体験がなければ、この「石原純と短歌」という文は生れなかつたと思うので、私事にわたることともご容赦願いたい。

いま引用した文にあるように、石原純は明治三十七年に伊藤左千夫を訪ねた。そのとき石原は二十四歳の大学生であつた。斎藤茂吉が左千夫に入門したのが明治三十九年で、やはり二十四歳の大学生であつたという。伊藤左千夫は俺の門人に大学生がいてと言つて喜んだという話があるが、それはこれらの人たちのことではないらしい。そのことは土屋文明著『伊藤左千夫』（白玉書房、昭和三十七年）に詳しい。また石原の作歌活動については斎藤茂吉の「アララギ二十五五年史」（全集、第三十五巻）を見るのがよい。

同じく引用文中に、石原は明治四十四年仙台へ移住するまで親しく伊藤左千夫の教を受けた、と述べている。大正九年春陽堂版『左千夫全集』第一巻、五三六ページに「親友石原純君が東北大学の教授として任に仙台に赴くを送る」という詞書きのある歌五首が出ている。いま最も得易い岩波文庫版『新編左千夫歌集』

一九八ページに右五首中初めの二首が出ているが、詞書きは簡単に「石原純君送別」となっている。古い版を引いたのは左千夫が純をどんなふうに扱っているか、よく分かるからである。

石原は仙台へ赴任後まもなく欧州留学を命ぜられ、シベリア経由でドイツへ向った。そのときの歌を少し引いてみよう。

しべりあの旅のはじめはさびしけれこの赤肌の山にしたしむ

停車場の名をかかげたるろしあ字が眼にふれにけりただにさびしく

あかときの眼にとほく見ればしべりあの野はおほろかに灰色なせり

十日馳せて汽車モスクワの街につきぬ空いとさむく朝みぞれせり

悠長で退屈な旅だろうけれども、それだけに詩情がある。ジェット機で飛んで行ったのでは何も見えはしない。ドイツへ行ってからも伊藤左千夫のもとへ多くの歌を送り、それらは『アララギ』に掲載された。もちろん専門の研究は熱心におこなわれていたのである。こんな歌がある。

うすぐらくけふも雨降りり室にありて「相対論」を草しつつありぬ

この「相対論」というのは石原自身の研究論文である。この秋出る予定の「科学史研究」に石原純の科学論文目録が載るが、この「相対論」は論文(20)ではないかと思う。それはドイツの専門雑誌に掲載されている。

石原はドイツでの留学を終わってからスイスに赴き、チューリヒの工科大学にアインシュタイン教授を訪ねた。そのときの感激を述べた歌をあげてみよう。

名に負へる相対論の創始者にわれいま見ゆるころうれしみ

われの手をひたすらにとりてもの言へる偉いなるひとをまのあたり見る

部屋のかなか空気ふるひて流れたりぬ我がおふぐひとの息にいるべく

ここでちょっと断っておきたいのだが、私は「石原純の短歌」について論評しようとしているのではない。科学者石原純の全貌をとらえるためには「石原純と短歌」という一項は不可欠である、というのである。その短歌を引用したりしても、それがとくに秀歌だとか代表作だとかいうのではなくて、筆者が感銘を受けた歌や、今でももう覚えにおぼえているような歌を思い出しているのに過ぎない。私はこの歌集を読んで自分でも歌を作るようになったからである。

私が石原先生のお顔を初めて見たのは、高等学校二年のときであるから、大正十年か十一年で、歌集の出る前であった。そのころ相対性理論というものが広く話題になっていたので、一高の科学同好会が石原先生を呼んで相対性理論の話聞いたことがある。この企画したのは一年上の藤岡由夫などであったから、私は二年生だったことになる。私は同好会に入っていなかったが聴講はむろん自由

であった。場所は物理の階段教室であった。

定刻より少し前にそこへ行ってみると、聴講者は二、三十人程度であった。黒板に誰が書いたのか「原阿佐緒女史も出演します」という落書きがしてあった。先生が仙台をやめて東京へ出て来られた直後のことである。この落書きは先生が現れる前に消されたことは言うまでもない。先生は和服姿で金縁の眼鏡をかけていた。一緒に聴講した年長の同級生が、あれは女に好かれるタイプだな、と言った。

このときに一方的にお顔をみたというだけであるが、親しくお目にかかったのは昭和六年、岩波書店から雑誌『科学』が刊行されるようになったときである。石原先生がその編集主任になられ、私にも仕事の一部を手伝うよう先生から依頼を受けたのであった。これとは別に先生のお仕事をお手伝いをしたこともある。新潮社から『日本少国民文庫』というのが企画され、石原先生がその一冊『世界のなぞ』を編集されるのについて、その手伝いを頼まれた。神田鈴蘭通りの中華料理店でその打合せ会があった。新潮社側と先生のほかには、さきごろ亡くなった吉野源三郎氏がおられた。もう一人記憶に残っているのは、学校を出られたばかりで花のような石井桃子さんがいた。これでその年代が大体分るはずである。

ところで話をもとへ戻さなければならぬ。石原は大正二年スイス滞在中に伊藤左千夫の訃報に接した。通報したのは斎藤茂吉であろう。石原は翌大正三年に帰朝し、やがて教授に昇進した。東京生れで東京育ちの石原が『アララギ』の師友とも離れた仙台の生活はわびしいものであったのに違いない。

地をかへて住みなれぬ家にさみだれのいく日も降れば栗の花過ぎぬ

そんなとき歌の会で原阿佐緒を知った。この女流歌人に心をひかれた心境は推察できる。私はルポライターではないから、二人の交遊のあとなど詮索しようとは思わないが、この関係が嵩じて大正十年に大学をやめる結果になるのは事実である。石原は仙台を引揚げて東京へ戻り、著述生活に入る。相対性理論に関するものなどは此処では省くが、大正十一年五月に歌集『鬢日』がアララギ叢書第十四編としてアルスから出版された。このころは「アララギ」からは事実上離れていたようであるが、歌集をアララギ叢書の一冊とすることは前から予定されていたのであろう。ちなみに同叢書大十三編は土田耕平の『青杉』（大正十一年三月、古今書院）、第十五編は中村憲吉の『しがらみ』（大正十三年七月、岩波書店）である。

『鬢日』（二一九ページ）に「八月五日赤彦兄の北海道旅行の途次、立ち寄られたのを迎へて、共に塩釜のうみに渡り、松島の端巖寺を訪うた。曇った空からは時々雨が降つてゐた。静かな穏やかな気分の日であつた。」という詞書きのある歌が十五首出ている。赤彦が北海道へ行ったのは大正六年であるから、八月五

日というのは大正六年八月五日である。その歌の中に次の一首がある。

我が二人船のへさきに坐りぬぬいりうみのうへのくもりは落ちず

赤彦の『太虚集』に「石原純君と金華山に遊び帰路風浪に逢ふことあり」という前書きのある歌が十四首ある。これは大正九年の所に出ているから、作歌は旅行よりだいぶ後であるが、純の場合にも実際の出来事と作歌とは時を隔てていることが間々ある。それはさておき、このようなアララギの仲間との友好関係も破綻のときが来る。鍛錬道を説いた赤彦の眼から見れば、石原の事件は苦々しいものであったかも知れない。

これまでに少数だが歌の引用を試みたのはすべて『アララギ』に発表されたときの従来普通におこなわれている書きくだし形式を用いた。これで十分鑑賞し得ると考えられるからである。しかし作者が自選して編集した歌集『鬢日』では、表記の形式が少し変っている。それは句読点が入っていることと、一首を多くの場合三行に、極めてまれには二行または四行に書いていることである。

歌も文法的には主語、述語、補語から成るセンテンスであるから、句読点つけてもよいどころか、つけた方が合理的で読み易い。きちょうめんな理学者のやりそうなことだ、などという月竝な注釈は無用である。また、二行に書こうが、三行、四行に書こうが、色紙に歌を書いた古い例など見ても、別段珍しいことではない。しかし石原がのちに——正確に言うところ『日光』以後——不定型短歌とか新短歌の提唱をしているのを見ると、『鬢日』を編集しているころ、すでに定型から離れようとする心の動きが感じられるのである。

『日光』以後のことは後でまたふれることにして、『鬢日』という歌集をみると、これには明治四十四年すなわち仙台移住のときから、大正十年すなわち仙台を離れるときまでの歌八百余首が収められており、石原純の短歌はこれで代表されていると言つてよい。伊藤左千夫を本所の寓居に訪うた明治三十七年から始まる「アララギ」でのいわば修練の時代の作品は悉く捨てられている。しかしそれらの中にも私は感動した歌が多数あったのを記憶している。まだ一々点検したわけではないが、歌集へ収録するさい手を加えたものがある。これは誰でもやることであるが、一例をあげると、前にあげたチューリヒで初めてアインシュタイン教授に逢ったときの歌が「アララギ」では初句「名に負へる」であったのが、歌集では次のようになっている。

名に慕へる相對論の創始者に、

われいま見ゆる

こころうれしみ。

これは『鬢日』の表記の例になるもので、重複を省みずあげてみた。作者はこの改作の方で読んでほしい、と言われるかも知れない。実際、「名に負へる」は有

名な、というだけで平凡であるが、「名に慕へる」は名をきいて尊敬していた、という気持ちが出ていて、旧作の比ではない。

ところで、この歌手は一度印刷されただけであるから、今ではたやすく見ることができない。昭和四年に改造社から出た『現代日本文学全集』第三十八巻『現代短歌集・現代俳句集』の二一八―一九ページに『鬢日』からの歌四十四首が出ている。これは作者自選と思われる。表記の形式は作者と編集者の妥協の産物らしく、句読点を残し、改行の代りに一字アキをおこなって、二行に書きくだしとなっている。たとえば、

高はらのすぐろなる空　我は見ぬ。ゆふべを  
深むかげはうごけり。

これは富士見高原の歌で、歌集（二〇ページ）では次のように三行に書いてある。

高はらのすぐろなる空  
我は見ぬ。

ゆふべを深むかげはうごけり。

ところで、この改造社版の『文学全集』というの今は稀本の部類に入るのであろう。近ごろの文学全集の類に石原純の歌が入っているかどうか、私は知らない。原阿佐緒の場合は熱心な編者と出版社があつて『原阿佐緒全歌集』（至芸出版社、昭和五十三年）というのができている。「石原純歌集」というのがあつてもよさそうである。こんな話を冒頭で述べた科学史研究の方で石原純に関心を持っている仲間にしたところ、歌も集めましょうという。

そういうことになれば、いわゆる定型の短歌ばかりでなく、新短歌や歌論も一緒に集めておきたいと思う。そこで柄でもないのだが、それらについての見通しを述べておきたい。

石原純の不定型短歌あるいは新短歌への動きが顕在化するのは大正十三年に雑誌『日光』が発刊になり、石原もその同人の一人となって歌論と作品を発表したときからである。この雑誌については斎藤茂吉の『明治大正短歌史概論』（全集、第三十五巻）を見るのがよいが、私はそのころ大学の学生で正門前の書店に出た『日光』を買って読んだのである。それはもちろんいま手許にはないが、昨年（一九八〇年）十一月三日に石原純が生涯を閉じた房州の鋸南町（もとの保田町一帯）の文化祭に遺品の展示があるとの記事が朝日新聞に出ていたので、行ってみた。その中に『日光』も何部か陳列されていたので、なつかしい思いで眺めたのである。

それは同地在住の鈴木伊三郎氏が大事に守って来たのを公開し、以後鋸南町教育委員会に保管するそうである。鈴木氏は石原純と原阿佐緒が保田に住むように

なつてから、短歌や詩について兩人から指導を受けられたそうで、原が保田を去ったあとでも巖日荘に出入りし、ことに石原の晩年にはお手伝いの手配などもされたり、臨終に立ち会わされた数少ないひとの一人である。

石原は雑誌『科学』の編者のため週一回保田から上京していたが、昭和二十一年秋、東京で進駐軍のジープにはねられて大怪我をした。そのことは岩波書店の稲沼瑞穂君（故人）から聞いたが、私は京城から引揚げて来てあわたましい生活をしていたので、お見舞いにも行けなかった。最期のことは鈴木氏の「石原純と原阿佐緒」（房日新聞、昭和五五年十二月一〇日）によって詳しく知ることができ。石原は上記の怪我で慶応病院に入院三ヶ月で一命は取りとめたが、その後保田の自宅で療養中、昭和二十二年一月十九日脳溢血で永眠されたという。

この文化祭のとき頂戴して来た展示品目録を見ると『日光』創刊号に「短歌の新形式を論ず」という論文と「短唱教篇」と題する作品が載っている。こういうものも集めておきたいと思う。遺品の中には見えなかったが『三角州』という雑誌があるはずである。これも一度くらいは買って読んだ記憶がある。薄いパンフレットのようなものであった。

『日光』の方は多くの流派の集団であったが、その後石原純の主宰する新短歌の雑誌『三角州』が何号か出たのである。『日光』や『三角州』が何号まで出たかについては、書誌に詳しい大森一彦君から詳細を教えてもらったので、あとはコピーを取ってもらうだけである。『日光』以後の新短歌の見本はまだ集まっていない。その代りにはなるまいが、「ニュートン祭の歌」を思い出したから披露しておく。ニュートン祭のことは前に少しふれた。

地軸傾く冬の夜を、

興せずや君。

紅き林檎のまろぶまで。

このさき歌詞がまだあったかどうか、急には思い出せない。これは新短歌提唱よりだいぶ前の作と思われる。ニュートン祭の起源については田中館先生の談話があるから、あれを辿れば大体見当がつくかも知れない。「地軸傾く冬の夜」というのはわれわれには面白い。「まろぶ」という語が自然に出て来るところなどは伊藤左千夫のもとで万葉調の修練を受けた若き日の作者の佛を伝えているといえよう。

原阿佐緒の場合は生前に出された歌集が何冊もあり、歌集に入らなかった作品もあるであろうから、全部集めるのは大変だと思うが、石原純の歌集は一つしかなく、それ以外では大体上記の諸雑誌で網羅されるであろう。それ以外の雑誌や新聞に歌を書いたのは絶無とは言えないが、余りないと思う。こんなことを書いていたら、まだ活字になったことのない歌を一つ思い出した。

アインシュタインが日本で最後の講演を福岡でおこなったとき、宿は天神町にあった栄屋旅館であった。栄屋は戦災にあったが、アインシュタインの書いた額が家宝として保存されている。一つはローマ字で「サカエヤ」と書いたもので、もう一つはアインシュタインが頭文字A Eを筆太に書き、石原が左右の余白にまたがって「おほいなる相対論の創始者の鬢ややしろし冬の陽あかく」と書いて純と署名し、そのあとに「アインスタイン教授と共に福岡に來りて」とある。この歌はチューリヒで逢ったときの歌（前出）を踏まえての即席と思われるが、まだ十年を経ないのにア教授の髪に白いものが見え始めていたのを捕えている。

こういうわけで「全歌集」というのはむずかしい。われわれは『石原純歌集・歌論』という形で満足することにした。これは白昼夢ではなさそうである。

すでに本文で述べたことであるが、客観的に書こうとしながら、所どころに石原先生という言葉が出て来て、不統一のものになったが読者の寛容を願う。



『ももんが』 二十五周年記念号 一九八一年十二月号

ふとした機会があつて私は角川書店の雑誌『短歌』十月号（一九八一年）へ「石原純と短歌」という文を書いた。それはこの科学者の全貌をとらえるには無視することのできない一面を述べたもので、その作品を論評しようという趣旨のものではない。今度書くにはその続きのようなものである。

石原純と大正十一年に歌集『靉日』を出すとともに短歌をほとんど作らなくなった。それはアララギを離れたことが主なる原因であろうが、その前年に東北大学教授の職を辞して東京へ戻り、著述生活を始めるや急に忙しくなった。これは一見奇妙かも知れないが、彼が最初から研究題目とした相対性理論が学問界だけでなく、一般世間においても話題になりかけていた。改造社の山本実彦はすでに大正九年に石原を仙台の研究室に訪ねて、アインシュタインを日本へ呼ぶことについて助力を求めていたという。石原は一九一三年にチューリヒ工科大学にア教授を訪ねて約半年その教室にいた人だからである。

アインシュタイン来日のことはまたあとで述べるが、岩波茂雄は相対性理論についてがっちりした解説を書いてくれるよう石原に依頼しており、仙台を引払って東京へ戻って来た石原を信州富士見へ招いた。このようにしてできたのが『相対性理論』である。この本の序文を見ると「大正十年九月二十二日信濃富士見にて」とある。そうしてこの本は同年十二年に発行になった。これよりも少しやさしく解説した『エーテルと相対性原理の話』も同年同月岩波から出版された。

ここでつまらぬ注釈を入れておきたい。今はアインシュタインと書くのが普通であるが、石原はアインスタインと表記している。従って改造社が準備を重ねて大正十一年十二月に出した『改造』の特集号は「アインスタイン号」となっている。アインシュタインが一般に用いられるようになったのは私の考えでは岩波『西洋人名辞典』（昭和七年）が普及してからではないかと思う。その編集者の一人である石原純も従ってまたアインシュタインと書くようになる。

この『改造』の「アインスタイン号」には石原を初めとしてわが科学界の諸大家が相対論の解説や感想などを載せているのは勿論だが石原純の「黒く究まる光」という詩が載っている。これには「アインスタイン称賛詩」という副題がついている。これは改造社が勝手につけたものと思う。というのは、同社が大正十二年二月に発行した『アインスタイン教授講演録』に作者はこんな副題はつけずに雑誌のときの誤植を正すとともに僅か手を加えて再録しているからである。

しかし内容はまさに副題のようなもので、これは大正十一年秋の作かと思はれ

る。これは二三〇行あるから、かなり長い詩で土井晩翠の「星落秋風五丈原」の三分の二くらいはある。しかしこちらは「……／＼科学の流れが育つて来ました」という自由律「あります調」である。「である調」の詩は上田敏の訳詩のなかにもすでにあるが、「あります調」はよく調べないと分らないが、ことによるとこれが最初かも知れない。この詩の題名のイメージはなかなか浮んで来ないが、黒いカオスの中にある哲人が光を認めた、というようなことであろうか。この作者は黒に対して異常とまでは行かなくても特殊の感覚をもっていたような気がする。かつての短歌のなかにも「黒く」とか「黝ずみて」といった語が数多く見られる。（「石原純における黒の研究」などというのは卒論の題目にはならないだろうか。）

ところで、これと好一对の長詩がもう一篇ある。前記の『ア教授講演録』に「ひとりの偉大なる科学者に接して」という題で発表され、のちに多少手を加え題名の最後の「に接して」を省いて随筆『夾竹桃』（昭和十八年）に再録されたものである。これも二二二行あるから長詩である。内容は題名から想像されるように偉大な科学者に日本で再会した感激をうたったものである。

この二篇は同一のモチーフに基き、むしろ偶然的のものであって、作者がこの形式の詩を提唱したというようなものではない。しかし偶然とは言っても、人生のこと総て偶然の集合のようなものであり、この作者が若いときあれほど熱中した（『アシビ』と初期の『アララギ』を見よ）短歌を捨てて（もちろん多少は作っている）詩の方で大いにものを言うようになる、その滑り出しはこの二篇の長詩にあるような気がする。

このことと関連して、もう一つ注目すべきものがある。大正十二年五月に出版された『人間相愛』という文集の末尾に載っている「詩二篇」である。この本の序文を見ると「心に触れて時々書きしるしたものを茲に集めて、云々」とあるが、この著者のわるい癖で文も詩も何時何処へ出したものか全然書いてない。この詩の初出は今のところ分らないが、出版年月のことを考えると、作ったのは大正十一年ではないかと思われる。そうすると前記二篇の長詩とほぼ同時期の作品であって、何れが先かを決定することは困難である。

「詩二篇」というのは「卵」と「水」の二篇である。初めの「卵」は三十五行ある。まるごと引用すると紙面を要するので、作者にはわるいが第一小節だけ引用してみる。

あをい瀬戸引きの鍋のなかに  
おほきな卵が三つ煮えてます。

或る冬の明るい日、  
ひらいた鍋のおもてに

もや／＼と湯気がみえて

絶えず湧き絶えず消えてゆきます。

ざっとこういうものであるが、アインシュタインの詩よりもこの方が詩としては滋味があるような気がする。人麻呂は挽歌の上手な宮廷歌人であったが、終始挽歌に感心していたのでは身が保たない。うで卵を作るといふ日常茶飯の行動にだって作者のゲミュートが動けば詩は成立するはずであろう。卵は三つあるのがいい。この詩がよい詩かどうかは詩の評論家が決めてくれるだろうが、相対論を勉強しなくても安心してよめる作品である。

おもしろいのは三五行の詩の本体のあとに※印を数箇縦に並べて二首の短歌がついていることである。

濡れとほるたまごの殻に、うつりある

障子のかげの歪めるをみる。

湯に浮ける卵に見いり、しみじみと

わがかなしみに触れゆきにけり。

短歌に句読点をつけ、適宜行を改めることは歌集ですでおこなっている所であり、その点を除けば古典的形式の短歌として見られるものであり、多少短歌に親しんだ人なら、これなら分ると思うだろうと思う。これは、とくに後者は、文語調であるから詩の本体とそぐわないけれども、万葉の長歌と反歌の形式を連想させる所がある。作者のそのときの意識構造はよく分らないが、長年親しんで来た短歌が頭のどこかにこびりついていたのであろう。

もう一篇の「水」は「ちひさな河が冬田のなかをながれて／海ぎしでふくれてゐます。」に始まる五十九行である。保田あたりの情景をモチーフとするものであろう。この作者はこれより少し前に「短歌連作私論」（『アララギ』、大正九年一月十二月）を書いているが、もっぱら詩を作るようになって、同様に連作形式で進むからすぐに五十行くらいにはなってしまう。斎藤茂吉の「死にたまふ母」（『赤光』）は五十九首の大連作であるから、一首を数行に分けて書くと前記晩翠の詩くらいになる。これはもちろん長さのことだけの話である。

さて石原純が短歌ならぬ詩について積極的に発言し同時に作品を発表するのは大正十三年に『日光』の同人に加わってからである。そのころはアインシュタイン旋風もおさまって石原の身边もひまになったという事情もある。その間に大正十二年関東大震災があったが、彼は保田にいたから激震を体験し、帝都の焼けるを目撃したとしても、彼の山荘はつぶれなかったから、直接ひどい目には遭っていないと思われる。

石原は『日光』創刊号（大正十三年四月）へ「短歌の新形式を論ず」（二十二枚）という論文と「短唱数篇」と題して詩三篇を出した。詩は論文のすぐあとへ続い

ているので、どう見てもその論文の趣旨にそうした作品と考えられる。従ってこれは構えて作ったものである。そこで一部分だけ引用してはよくないと思われるから、第一の詩だけは紙面をとるが、まるごとあげてみよう。

災後一百日

不慮の

おほき殃わざはひひに

虐げられた

かなしい主都。

あゝ、惨ましいこの形骸むくろ。

そこには

あまたの家財とともに

はかなくも親と子が

生きながら焼き葬ほふられた

あかぐろい土がたまつてゐるではないか。

おそろしい

火災のおもかげに

おびえたる幾夜のなごりであらうぞ。

災さいをうけた人々に

いまかなしい現うしさが迫る。

見る限り、トタン屋根が

雨に濡れて

しろく寒さうに光つてゐる。

あ々、災後の町よ。

いま蘇あへるべき喘あへぎに忙がしい。

白板張の小さな家並、

日のまだ暮れきらない夕を

もうそこに淡い電燈がともってゐた。

雨ぐもりの空のしたに

この町々はひとり明るい。

汽車の高架線から

私はふたたび焼跡の町を見た。

災後一百日、

人々は假屋のなかに

しかすがになりはひをいそしんでゐる。

焼け灰のつもりたまつた

なかだかな街路のうへ、

雨のひどい泥濘、

満員の電車を

私はいくたび佇み過ぎしたか知れない。

あゝ、凄惨なるこの災禍、

私はみづからの生活の資を

いまだここに探さうと云ふのであらう。

かくてひろい主都を

終日あゆみなづまねばなるまい。

しづかなお濠端に

柳の並樹があかく枯れてゐる。

焼けくづれた煉瓦が

この路ばたにも堆かい。

宮城まへのひろい芝生に  
罹災民たちの

しろい天幕てんとがならんでゐる。

寒風はその哀音を

この空に日毎ひごと鳴らすであらうに。

各小節は従来の短歌よりだいたい字数が多いが、それでもやはり基盤をそこに置いているように思われる。短歌の新形式と言えば一層精確であり、西洋語で言うなら不定冠詞をつけるべきであろう。各小節はたいてい五行に書いてあるが、四行のが一箇所ある。自由律であるからそれは自由のはずである。これは十小節から成るので、子規の一題十首をかすかに連想させるが、作者はそんなことを考えたわけではあるまい。この形はこの詩だけで、これからあとの作品はもっと自由な形式をとっている。

関東大震災はインシュタインの来日とは性質は異うがやはり大事件であったから、異常な感動が湧いたことは当然である。アララギ震災歌集『灰燼集』（大正十三年）には倒れた家の下敷になったり、火の子をかぶって川へ飛び込んだりした人々のなまなましい体験がうたわれている。島木赤彦は諏訪にいたから直接罹災はしないが、在京の同人を気遣って東京へ向った。「大正十二年九月三日信濃を出で五日着京下町震災地を訪ふ」という前書きで「遠近の烟に空やにごるらし五日を経つつなほ燃ゆるもの」以下二十余首を出している。

これはまだくすぶっている帝都の光景であるが、純は災後百日すなわち十二月に入ったところ、トタン屋根が立ち並んだのを見ているので時間的距離があり、また熱情を持ちつつ他面冷静な科学者でもあるこの作者の情緒は趣きが異うのは当然である。ところでこの詩の情景と意想を短歌形式で言おうとしたらどんなになるか、という阿呆な実験をやってみた。まず第一小節であるが、ひと晩考えてやつと「おほなゐに／まがつ火さへも／加はりて／みやこ大路を／廃墟となしつ」というのをこさえてみた。

大地震とか震災などという語でも短歌に入らないことはないと思うが、地震国日本には「なあ」という語があるので使ってみたくなる。そうすると「まがつ火」になり「みやこ大路」と余りにも古典的なので最後の方でいくらか新しくしてみようと試みたが、これでは全体として古くて駄目である。もうヴァリエーションを試みるまでもない。古典的形式にはそれなりの良さはあるものの、たいへんな制肘があることが、実験をしてみるとよく分る。

「短唱数篇」のあとの二篇は「黒い煤」というのは「雪ふる朝」でこの二つは

前のものよりも短い。これらの作品は前のは趣の異なるものであるから、それらも見るべきであるが、長くなるので省略しよう。これらの詩を紹介するのが目的ではなく、石原純の短歌を集めているうちに、それが詩に変わってきたので、それらをも集めてみようと思うようになった。この話をする手伝おうという人や、いろいろと参考資料を提供してくれる人が現れて来た。そのおかげで今まで知らなかった材料が分って来た。たとえばこの作者が『短歌講座』（改造社、昭和七年）に「新短歌概論」というものを書いていることは今まで気づかずにいた。またその新短歌運動を論じた評論や著書もすでにあるそうである。

私は短歌史にまで口出ししようとは思わないが、「新短歌」という語には自分なりの抵抗を感じる。それでこの文の題にも「短詩」という表現を用いた。この語も熟していないが「新短歌」よりむしろと思う。こういう意見の人はほかにもいるようだ。単に「詩」でもよいかも知れないが、「シ」では連想がわるく、病院には四号室というのではないらしい。短詩と呼んでも著者の意に反しないことは次の引用文を見れば分る。

私がこの文の表題で自由形式といふ代りに新形式と称へ、またこの様な自由形式で作られたものを短歌と称へたことを不穩当であると論ぜられる人もあるでせう。併し私はこのような名称の問題には深入りしたくはありません。私はただ今は普通に短歌といへば従来の一音形式のものを指すと云ふことに対して、自由形式を新形式と云うたまでです。又単に之を短い歌といふ意味で短歌の名を保存したに過ぎません。他に呼び換へる方が適當であるなら、名称はどうでもよいと思ひます。現に私は昨年十二月の『改造』に一つの試作（舞台の黒劇）を発表した場合には之に短詩（連作）と附記しました。

（大正十三年四月『日光』創刊号、三〇ページ）

この引用の終りの方に、昨年（大正十二年）十二月号の『改造』に「舞台の黒劇」という作品を発表したとあるので、それを写してもらった。その初めの方は次のようである。

#### 舞台の黒劇 （短詩連作）

変災よ、

汝の翼は何がゆゑにしかく黒く、

そしてしかく広くひろがるのであるか。

絶大な恐怖、

人間はいまそのまへにおびえてゐる。

すなわちこれも関東大震災をうたったものであった。いま引用したのは第一小節で、全部

で十四小節七十二行から成る。ここにも「黒」が登場するが、これは悪魔の色で

ある。バレエでも悪魔は黒いマントを翼のようにひろげて荒れ狂う、あれを想像すればよからう。途中をとばして最後の小節をみよう。

あゝ、一九二三年九月一日、

深刻なる運命が

私たちの心の奥を刳つて過ぎた。

あらゆる現実の惨態が

黒く舞台に演ぜられてゐる。

(房州の一漁村にて)

これで詩の題名も納得がいく。これは前掲の「災後一百日」よりも少し前と見られるから、初期の短詩の一つということになる。題名の下に活字を一段落して(短詩連作)の文字がある。これは前記論文中に述べていられているように、作者が自分の作品はこう呼んでもよいものだと思込んでいるのである。すなわち短詩という言い方が原作者の意にも適うものであることが明瞭である。

ところで『日光』は歌壇各派のいわば異端者たちの大集団であったから、永続きするはずがないのである。昭和二年までに三十余冊を出して消滅してしまつた。石原はこの集団のなかでは活発な方で初めはほとんど毎号作品か文章を出している。文章のなかには随筆ふうのものや「日光室」のような六号活字の勝手なことを言うものなどもあるが、注目すべきものに「現代詩歌研究」(大正十三年六・七八および十四年一月号)がある。これは詩論になるから、ここではその内容にまで立ち入ることはしない。

『日光』が廃刊になつてから、石原純は今度は自分で主宰するいわゆる新短歌の雑誌を出すようになる。『三角州』というのは発行当時本郷の書店で見たことがあり、一度くらいは買ったような記憶があるが、このほかにも『渦状星雲』『短歌創造』『立像』『新短歌』などがあることを教えてもらった。しかしこれらのうち所在が分つたのは僅かであつて、大部分は何処へ行つたら見られるか見当がつかない状態である。大方の協力を願ひたいのである。

石原純は大正十一年から房州の保田に住んだので、同地方の短歌愛好者たちが(房州は古泉千樫の故郷であり、純がそこへ住むようになったのも千樫の案内で曾遊の地であつた)石原純と原阿佐緒を師範格として、大正十五年三月『波止場』という同人雑誌を出したそうで、その創刊号のコピーを同地在住の人から頂戴した。前に引用した短詩には震災のものが二つあつたので、少し趣きの変つた作品をこの雑誌から引用して終りにしたい。

終列車

貨物混合の



或る鄙びた地方の終列車  
冬ながらステイムも通らない  
くすぶつた汚い三等客室内に、  
ひとりふたりの旅客が  
外套にくるまつて  
こくり／＼みねむつてゐる。  
うすぐらい黄いろい燈火が  
手垢じみた空椅子の肘掛を  
妙にきらりとひからせてゐる。  
床にちらばつてゐる紙くづの塊りも  
黙々としてなんとわびしいことであらう。

路々の小駅ごとに  
たま／＼の駅員の声もとだえ、  
そこばくの荷をあげおろす  
駅夫のみがいつまでも何か云ひあふ。  
ひどく気ながい停車のあとで、  
がたりとした激動が  
みねむつた人たちを驚かしながら、  
汽車はまた、気のぬけたような  
その緩々とした進行をつゞける。

さながらに退屈な  
無為な人生。  
くらやみのむかうには  
いつ崩れるかもわからない假修繕の縫道や、  
危なげな橋梁さへも横つてはゐるが  
併し、なにを考えるともない  
いち時の気安いころで  
私たちもまたそのなかに座るのであつた。